# 乗谷の祭礼芸能と年中行事

## ――伝統行事に息づく朝倉文化――

#### はじめに

「大きく影響した。戦国期以前から越前の寺社祭礼の場で活動していた越前猿楽や幸若舞などの芸能者になったの実明の乱で頭角を現し、越前一国を治める大名になったの文明の乱で頭角を現し、越前一国を治める大名になったの文明の乱で頭角を現し、越前一国を治める大名になったの文明の乱で頭角を現し、越前一国を治める大名になったの文明の乱で頭角を現し、越前一国を治める大名になったの文明の乱で頭角を現し、対力から越前の寺社祭礼の場で活大きく影響した。戦国期以前から越前の寺社祭礼の場で活大きく影響した。戦国期以前から越前の寺社祭礼の場で活大きく影響した。戦国期以前から越前の寺社祭礼の場で活大きく影響した。戦国期以前から越前の寺社祭礼の場で活かで一乗谷では朝倉文化が醸成され、家臣たちの多くが手などの新たな活動の場を見出していったと考えられる。やなどの新たな活動の場を見出していったと考えられる。やなどの新たな活動の場を見出していったと考えられる。やなどの新たな活動の場を見出していったと考えられる。やなどの新たな活動の場を見出していったと考えられる。や技能を対していったと考えられる。や技能を関する。

のうちに谷間の農村へと姿を変えていった。寺社や町人たちもすべて谷外へと引っ越していき、短期間後は都市として再興することなく、城下町を構成していた

宮

永

美

一乗谷はこのような変遷を経た土地柄であり、城下町の一乗谷はこのような変遷を経た土地柄であり、城下町の一乗谷はこのような変遷を経た土地柄であり、城下町の東部について、その内容や由緒・伝承の中に、朝倉文化の影響について、その内容や由緒・伝承の中に、朝倉文化の影響について、その内容や由緒・伝承の中に、朝倉文化の影響という視点からは、十分に検討されてこなかったという一面がある。そこは、十分に検討されてこなかったという一面がある。そこは、十分に検討されてこなかったという一面がある。そこは、十分に検討されてこなかったという一種があるに、一乗谷はこのような変遷を経た土地柄であり、城下町の一乗谷はこのような変遷を経た土地柄であり、城下町の一乗谷はこのような変遷を経た土地柄であり、城下町の一乗谷はこのような変遷を経た土地柄であり、城下町の一乗谷はこのような変遷を経た土地柄であり、城下町の一乗谷はこのような変遷を経た土地柄であり、城下町の

1) (4)

は、

いずれも正月神事や新春の祝福芸であり、

その特徴や他地域の祭礼芸能・行事との共通点や違いが捉 えやすくなるものと思われる。 理し、その上で一乗谷の祭礼芸能や年中行事を見ることで、 をまとめてみたい。 まず初めに、 広く越前全体の祭礼芸能 越前の祭礼芸能・年中行事の特徴を整 ・年中行事の概観

は、以下の五件となっている。 福井県で国指定重要無形民俗文化財に指定されているもの 徴をよく残しているとされる。実際、 行事は数多く伝承されており、その内容をみても中世的特 た芸能が少ない傾向にある。 基盤とする祭礼芸能や、 る若狭に比べて、王の舞に代表されるような中世の荘園を 国といわれるように浄土真宗の影響が色濃く残り、 越前の範囲は福井県の敦賀以北とするが、 、浄土真宗以外の宗教行事に根差し しかし、冬の祭礼芸能 現在 (平成二十七年)、 越前は真宗王 離接す ・年中

①水海の田楽能舞 [昭和五十一年指定、 民俗芸能  $\widehat{\mathbb{H}}$ 楽]

②睦月神事

[昭和五十三年指定、

民俗芸能

[田楽]]

③敦賀西町 の綱引き [昭和六十一年指定、 風俗慣習 〔娯楽

[平成七年指定、 民俗芸能 〔語り物 祝福芸]]

⑤糸崎の ④越前万歳 仏舞 [平成十六年指定、 民俗芸能 〔渡来芸・舞台

> とが、文化財として評価されている。 楽や猿楽・舞々などの中世芸能の特徴をよく残しているこ [福井市]、⑦水海のばいもしょ [池田町]、⑧能面まつり 越前の冬の祭礼・行事には、この他にも、 (6) 国 山 神

8 の作り物を引きまわして町中を練る風流化した予祝行事 の芸能に特徴があるものや、 多様な行事がみられる。これらは、 り[鯖江市]、⑤水落神明社の大雷子神事[鯖江市]などの すすめ 市]、⑪ごぼう講 田町]、⑨大本のみそぎ [池田町]、⑩粟田部の蓬萊祀 ③のように神事や修正会で使われていた能面や追儺 [勝山市]、 (正月十七日講) [越前市]、 ⑬川島のオコナイ [鯖江市]、 ⑩のように蓬萊祀という大型 ⑥・⑦のように田遊び 迎観音さまのお ⑭殿上ま

事の様子が文献史料からうかがい知られる事例を取り上げ、 承されてきたものと考える。 徴のある行事など、現状の内容には大きな差異がみられ 意味が強調された行事、⑪・⑫のように大食する直会に特 一会などの儀式が融合し、 豊作を祈る予祝儀礼(オコナイ)や寺院の修正会・ 意味や目的を変化させながら伝 この 中から、 中 世 の法会

そぎをしたり餅まきをしたりしてケガレを祓う除災招福 を開帳し五穀豊穣を祈願するもの、⑨・⑭・⑮のようにみ

田

# 二 中世越前の正月神事・オコナイの様相

ルーツを示す史料「稲荷大明神年中行事次第」〔天文十九二月六日に行われている⑧の能面まつりについて、そのまずは、池田町稲荷に鎮座する須波阿須疑神社において、まずは、池田町稲荷に鎮座する須波阿須疑神社において、

年(一五五〇)〕をあげる。

御稲荷大明神之小もり之次第

惣中、其内百文ハ大夫分江、
、正六日ニ小守、但其日紙袋ハ拙者、かいなさしハ、月小守ハさつへひ田いのこ兵へニ有之、五人也、

御三木おり候、、正十三日御弓はしめ、池田殿より五斗御供・五升

八か鬼に入より米一斗五升、候ハ、七度指也、其後さかきゆく也、はつ馬ニハ、二はつ馬小守、御とう之儀御公し取指也、若斟酌

し・くた之もち十五、同たう日ニさしいれ五升樟、四祭礼よひ之宮之儀、御供四斗二升・指鯖拾五く、三せつく小守、くら谷殿・池田殿両より御下行、

三木料候、五月ちうしゅんニ七守仕候、御庄内御、五五霊会小守、池田殿より五斗御下行、粽十連御

世

小畠村

春日社

昔は正月十四日翁の神事有之、今猶

ついた呼称で、翁猿楽・式三番のことと考えられるが、近われていた。「かいなさし」は、腕をさし伸ばす動作から

の地誌「越前国名蹟考」〔文化十二年(一八一五)〕にも、

ツ、又田はうりより之おり物如此候

こく之きねん、

のこ兵へよりあかり物有之、留事ハ神人ひとりニ糯米一升宛、神むかひにハい、九七日小守、御稲荷九日、又神おくりニ小守、御

五日にハこまいぬの大事お行也、能々口伝有之、殿より小守神田立、それより五人小守也、七月廿小守候、然共世上よりはつおけたへ候て、くら谷日野御前月小守、まへハ上夫料之はつおに而三人

天文拾九年二月廿八日 平忠経(花押)

「かいなさし」の芸能が行われ、大夫に出演料百文が支払、大日の神事が現在の能面まつりにあたり、天文年間には終礼行事や頭役・下行などが記されており、村人による頭祭礼行事や頭役・下行などが記されており、村人による頭にの惣社として栄えた神社で、年中行事次第には月ごとの庄の惣社として栄えた神社で、年中行事次第には月ごとの庄の惣社として栄えた神社で、年中行事次第には月ごとの庄の惣社として栄えた神社で、年中行事次第には月ごとの庄の惣社として栄えた神社で、年中行事次第には月ごとの庄の惣社としている。

面 舞面、 装束、 楽器有

八幡 社 中 略)於是二正月十五日為法案、

稲荷村 稲荷明神社 奏式三番并ニ舞楽ヲ、以為恒例ト、 池田惣社 (中略) 例祭 中略 正月

正月十一日使隷名婦 六日為鎮護国家御祈禱、 之神事、二月初午、 行翁之大事并舞楽 几

月二之卯大祭、 ・略

村薬師堂にて昔は正月十三日翁の神事有し由 画 装束、楽器等今に伝来す、

志津原村志津原村に翁ノ社と云有て、昔は正月十七日 翁の神事有し由、 面、装束今に伝

と書かれるように近世に入ると徐々に廃絶し、使われてい 納されていた。しかし、これらの神事について「昔は…」 とあるように、 池田の各村では正月神事の中で翁猿楽が奉

変化していった。 猿楽の奉納は途絶え、能面を公開する現在のような形へと 波阿須疑神社でも大正年間まで続けられたが、その後、 た能面・装束を残すだけとなっていった状況がみえる。

能部分が「水海の田楽能舞」としてよく継承されているも られるものの、 し」、「翁の神事」・「式三番」・「舞楽」など様々な呼称がみ 池田の正月神事の祭礼芸能は、時代によって「かいなさ 水海村八幡社の式三番・舞楽のように、芸

> のや、 こまいぬの大事などの行事が記されるが、これらは現在 中行事次第」には、弓はじめ・初午・三月節句・御霊会 粛々と続けられているものもある。前掲の「稲荷大明神年 年に一度、能面を御開帳する行事として変化しながらも また、 須波阿須疑神社や志津原白山神社のように

(5) 礼の場について詳細を述べる必要があろうが、本稿では先礼の場について詳細を述べる必要があろうが、本稿では先 行研究に拠ることとし、祭礼芸能を担う越前猿楽と彼らが 世の越前猿楽の活動や天台白山信仰系の寺社での法会・祭 視され、翁猿楽の奉納が浸透していた背景については、

も重視されていたことがうかがえる。池田で正月神事が重 は行われなくなっており、年中行事の中で、正月神事が最

斯波新三郎政綿袖判安堵状〔永正一六年(一五一九)〕(上 正月神事が広がっていく背景にあったと捉えたい。また、 活動する場が整っていたことが、池田の小堂や小社にまで

島孝治家文書)に、

池田上庄之□月ヶ瀬薬師堂之神田之事

壱段 おこない田カ

九日  $\dot{\mathbb{H}}$ 

弐百文本 如先之為取沙汰、 修理 田 於末代ニ不可有相違□

如件、

永正拾六年八月二日

### 恒 安 村人中口

なっていったものと推察される。 ると、新たな費用負担の仕組みがなければ存続が厳しくると、新たな費用負担の仕組みがなければ存続が厳しくなけれていた理由の一つと考えられ、近世以降、神田がなくな安堵されていたことも、中世に年中行事が安定して続けらとあるように、年中行事の費用や堂社維持のための神田が

でて、オコナイの神田が確保されていた月ヶ瀬村の薬師さて、オコナイの神田が確保されていた月ヶ瀬村の薬師と同じく正月神事で翁猿楽が奉納されていた。オコナイはと同じく正月神事で翁猿楽が奉納されていた。オコナイは農耕の動作をまねて豊作を祈願する予祝行事であり、近江農耕の動作をまねて豊作を祈願する予祝行事であり、近江農村の水口に挿し立てて用いる牛玉宝印の配布が行われる事例がみられる。現在、越前の正月神事で牛玉宝印を配布する事例は残っていないが、中世には月ヶ瀬薬師堂でも牛する事例は残っていないが、中世には月ヶ瀬薬師堂でも中する事例は残っていないが、中世には月ヶ瀬薬師堂でも中する事例は残っていないが、中世には月ヶ瀬東師堂でも中する事例は残っていないが、中世には月ヶ瀬東師堂でも中する事例は残っていないが、中世には月ヶ瀬東師堂でも中する事例は残っていないが、中世には月ヶ瀬東師堂である。

為内德於末代可進退、仍不可有相違状如件、并牛玉正月八日十三日両度ニ地下へ出、残壱石之米者有之、但此内参斗者、油灯明ニ薬師堂へ毎月八日出、池田庄於月瀨村宗正名之内壱石三斗田地、在坪甘酒前

## 永正十八年章 三月十三日

恒安村

清覚左衛門》

あったことがうかがえる。 
ていたのであり、正月神事の内容には多くの構成要素が納とともに豊作祈願の予祝儀礼や牛玉宝印の配布が行われれともに豊作祈願の予祝儀礼や牛玉宝印の配布が行われとあり、正月八日・十三日の両日に、村人へ牛玉宝印が配とあり、正月八日・十三日の両日に、村人へ牛玉宝印が配

れば、 (空) 「文明~大永年間」(大滝神社文書)によ寺寺庫収納田数帳』(文明~大永年間)(大滝神社文書)によして栄えた大滝寺での正月行事の様子をみてみる。『大滝して栄えた大滝寺での正月行事の様子をみてみる。『大滝

修正月会十日行餅配分

Ė

神明帳二枚、農五枚 …中略… 法用衆四人二枚宛、夷二枚、 法用衆四人二枚宛、夷二枚、 大導師別当御房五枚、岩神一枚、

惣而今夜入来聴聞貴賎上下心中所願皆令満足、故旨趣富貴、別而両郷安穏・諸人快楽・養蚕如意・五穀成就、昌・坊中安全・興隆仏法・広作仏事・法莚不退・寺内

右意趣者、

奉為

天地長久·国土泰平、特者寺院繁

えるであろう。 行事の内容が後世様々に変化していっても共通項としてみ 院繁昌・安全・安穏、養蚕・五穀成就を祈禱する年初の法 他にも荘厳講や常楽会・八講会などの法会が行われている 模して豊作を祈願する・オコナイと同じ)とともに、 とあり、 の分配が果たされる意味を持つ儀式であることも特徴とい られる特徴であり、 が他の法会とは異なる。また、餅を分配する行為は、 の餅が分配されていた。同史料によれば、大滝寺ではこの 修正月会はその意趣に示されるように、 大滝寺の修正月会では、ナリワイ(農耕の様子を 罪を悔い改め新年を迎える最初の法会である点 行事を担うことで序列確認や富(餅) 国土泰平、 オコナイ 正月

る小嶋景増書状〔永正十五年(一五一八)〕(瓜生守幸家文書) 江市)の大雷子神事(⑮)について、 を見てみる。 いて厄払いする神事として続けられている水落神明社 続いて、雷子(らいし)と呼ばれる団子を厄年の人が撒 中世の様子が知られ

当年之儀ハつとめ申間敷之由雖申候、 者今夜町衆罷出つとめ可申候、 正月十七日於御神明をこなゐの事、 当年之儀かたのことく可仕之由申付候、 可被成其心得候、 町衆迷惑に付 御神之事候間 而

> 年当年之引懸有 間敷候、 如先々従来年 ハ可被申付候也、

永正拾五 水落祝彦九 正 月廿九 郎

受け継がれる中にその残照は垣間見え、 (一五三六)の小嶋雪悦定書 る中世的なオコナイが、厄払い行事の意味を強めて続けら 名残と思われ、 たと伝えられていることなどは、牛玉宝印を挿す牛玉杖 境内に生えている桑の木を切ってその枝を参拝者に配布 の内容をうかがい知ることは難しいが、 る。中世の水落神明社のオコナイについて、史料からはそ られていることで、オコナイが継承されていたと考えられ 御神役として課せられており、 「行米一升宛之事」として、水落の町衆にオコナイの米が うな延引がないよう神明社の祝に伝えている。天文五年 出があったが例年通り勤めるよう申し付け、今後はこのよ オコナイについて、町衆から迷惑につき勤め難いとの 朝倉貞景の奏者衆を務める小嶋景増から、 五穀豊穣の祈願とともに護符や餅を配布す (瓜生守幸家文書)によれ オコナイの費用負担が定め 大雷子神事とし 昔は団子とともに 正月十七 申  $\bar{\mathsf{H}}$ 

相を概観してきた。中世には一 以上、 中世の文献史料から、 年をとおして祭礼・行事が 越前 0 祭礼 年 中 行事 Ó 様 れてきたものと考えられ

る。

代まで伝承された祭礼・年中行事もあれば、多くの廃絶し られて維持されていた。その後、越前の伝統行事として現 がら神田や村人・町衆などの負担という経済的基盤が整え 事は、その影響下にある小堂や小社へも波及し、小規模な とがうかがえる。大寺社や荘園の惣社で行われる祭礼・行 大滝寺などの白山信仰の寺社では盛大に執行されていたこ ちわびる中で新年を迎え五穀豊穣を祈る年初の行事として、 行われていたが、 的背景や土地柄・要因がみえてくるものと思われる。 るものあることから、その変遷をたどることで、その歴史 た行事もあり、また内容や意味を変化させて続けられてい 中でも正月行事は、いまだ雪深く春を待

0

## 乗谷の祭礼・年中行事の現況

事へと結びつけて読み取っていく方法は困難である。そこ 場所であることから、その歴史が祭礼や年中行事にどのよ り上げる。一乗谷の場合、朝倉氏の城下町として繁栄した 乗谷周辺で現在まで続けられている祭礼・行事について取 いて書かれた史料はほとんどないため、前章で試みたよう 様子をうかがい知ることのできる一乗谷の祭礼や行事につ うに影響を与え受け継がれたのかを捉えたいが、 越前全体の祭礼・年中行事をみてきたが、ここからは一 史料から祭礼行事の源流と祖型を探り、 現状の祭礼行 同時代の

> とめたい。なお、これまで福井県では、民俗芸能や祭礼 る場所については「一乗谷祭礼・年中行事伝承地略図\_ 中行事についても調査結果が報告されているので、それら などの調査報告書が出されており、一乗谷周辺の祭礼・年 能』(平成十五年)・『福井県の祭り・行事』(平成二十七年) 年中行事について悉皆調査が実施され、『福井県の民俗芸 調査成果も踏まえ概要をまとめる。また、継承されてい まずは現在の祭礼・行事の内容や形態・伝承などをま

#### Α いんのこと

参照していただきたい

ら搗いて小豆餅にしてにぎやかに分け合って食べる行事で 大きな臼で小さい数本の杵をさして大声で大勢で歌い 行う。区民がそれぞれ餅米一升小豆一合とお膳を持ちより して紹介されており、「区を三班に分け当番の家を定めて 日に当番宅で行事を行っていた。浄教寺老人会が発行した の参加費を集めて開催しているが、以前は当番制で三月 き・調理して小豆餅・しし鍋などを共食する。現在は千 日曜日)に行われている行事で、男性のみが参加し、 『我等の郷土浄教寺』(平成十四年)には「犬のこと祭」 乗谷最奥に位置する浄教寺町で三月初旬 (一日に近

ある。…このような形で昭和十二・三年頃までは続けられ

催された犬追物で射殺された犬の供養のためである」とい う話を伝えている。 ていた。」また行事名の由来について「朝倉時代三里浜で

### В

牡丹餅を作り共食する。冬季に麻布を織るため苧によりを の行事と伝わる。 かける仕事をこの日で切り上げ、 こと」と同じで、皆で歌いながらすりこぎで餅米をこねて る行事で、女性のみが参加する。 同じく浄教寺町で三月十五日に近い日曜日に行われ 当番の仕組みは 野良仕事が始まる仕事替 「いんの てい

#### С 火祭り

縄を吊るし、 火し燃やす。 お札を括る。 小屋組を作り、 し、その竹で間口1間半、奧行3間、高さ2間程の三角の 『福井県の祭り・行事』によれば、「近くの山から竹を切出 城戸の内町で、三月十四・十五日にかけて行わ 地区の男子が一乗谷河原に小屋を作り一泊し、翌早朝 暖をとり軽食したりして過ごし、二十四時に小屋に点 床に藁束を敷く。 十四日の十九時頃に町内男性と男子が参加し 昭和四十年頃までは四月中旬頃に行われてい 藁束で覆い、張出しや入口部分に太いしめ 小屋内部に正月飾りや古

> という概要である。また、男性のみの参加を厳守し が小屋に入ると火事になるとの言い伝えがある。 点火し、 田の土手の薄に火をつけて廻る行事であった。

### したんじょう

D

う」は、行列の掛け声である「したに~、 と引き上げる大名行列を模した行事で、朝倉氏の時代から 四百年以上続くと伝えられる。また行事名の「したんじょ 在は女子も参加して行われている。猪を退治して意気揚 れており、 行事で、昭和三十七年に福井県の無形民俗文化財に指定さ したんじょうは一乗谷奥の鹿俣町で五月五日に行われ 以前は男子だけが参加する祭りであったが、 したに~

れるツツジやフジなどの花 どの大きさの作り物 覆って作られる全長四m (マンサクの枝) で木組みを から取ってきた若木や柴 「したんじょう花」と呼ば 行列が引き回す猪は、

本作られる。行列は、



140

報告し、最後に浄善寺の境内で三礼が終わると、 もたちは揃いの法被を着て猪に繋がる紐を引いて集落内を 三十余名の列となる。 盛木瓜紋入り)・曳子・猪かつぎ・尻尾持ちの順で並び総勢 なっている。 で振り回 まわる動きをして、 練り歩く。 (露払い)・ほ 八幡神社と最勝寺・正覚寺をまわって猪を捕えたことを 行列は集落のはずれの堂山から出発し、 ら貝・大傘持ち(花持ち)・殿様 殿様が太刀でとどめを刺す、 それを子供たちが刀でたたき壊れるま 猪は大人十人以上で担ぎ上げ、 という流 · 挟箱 猪が暴れ 村鎮守 れに

#### Ε 花山 行事

乗谷の西側の山を越えたところにある栃泉町の登知為

(とちい)



ツツジなどの花で作られた花山

財に指定され 年に福井県の く昭和三十七 じょうと同じ 行われる行事 で五月五日に 民俗文化

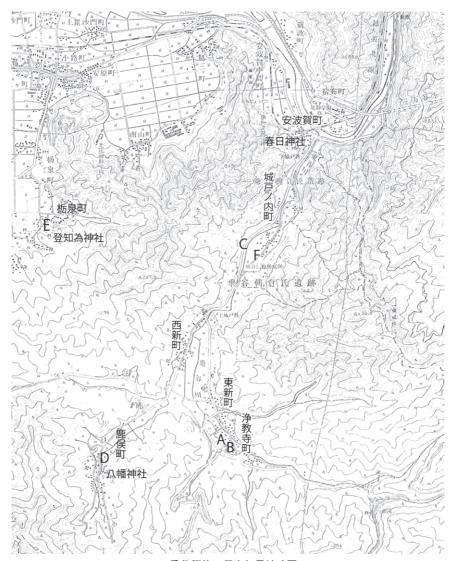
> 子のみが参加する行事であったが、 ており、 ており、乳幼児も親に抱かれて参加する。 女子や地区外に住む外孫も参加することで行事が維持され 行事の内容にも多くの共通点がみられる。 少子化のため、 現在は 昔は

める。 持って、「花山権現」の音頭取りをして行事の進行役を しない決まりとなっている。 が務め、 事は終了となる。 殿前の杉の木の枝に投げかけて残骸を散らかしたままで行 にそれぞれが持つ花山を神社の敷石に叩き付けて壊し、 練り歩く。再び神社境内に戻り拝礼した後は、 神社で拝礼した後、「花山権現」の掛け声のもと集落内を 棒の先端に丸く飾り付けて自作した作り物(花山)を持ち、 子どもたちは、 五穀豊穣などを祈願する行事として行われている。 役男になると青年扱いとなり、 花の編笠をかぶり腰に刀を差し右手に指揮棒 行列の先頭、 ツツジやシャガなど春の花を集めて竹 現在は子供の成長と火災鎮 中央、後尾は選ばれた役男 翌年から行事に参加 合図ととも

#### F 玉

護

万灯夜など様々な催しが行われる。 八月週末に朝倉氏遺跡内の各所で武者行列や火縄銃実演 て行わ 朝倉五代当主義景の追悼供養祭を復活させたお祭りとし れるイベントで、 義景の命日 (八月二十日) 現在では楽器演奏や象 に近



一乗谷祭礼・行事伝承地略図

棋大会・演芸・歌謡ステージなどもあり一大観光行事と 例祭などが含まれている。 なっているが、二日間の日程には朝倉氏の法要や朝倉神社

谷がどのような芸能的環境にあったのかを整理し、今一度、 わっておらず、地域の歴史を語り継ぐ中で、朝倉氏へと結 事例を概観した。中にはAやDのように朝倉氏との由縁を や影響が残っていないかをみてみたい。 国時代の一乗谷での芸能興隆の事績を集め、そこから一乗 漠然と語り伝えるものもあるが、いずれも由緒記録は伝 乗谷の祭礼・年中行事の中に、朝倉文化に起因する要素 つける解釈と付会が生まれた可能性がある。次章では戦 以上、一乗谷の祭礼・年中行事の現況についてA~F の

は、

# 乗谷の芸能興隆と祭礼・年中行事への影響

「朝倉孝景条々」にある芸能者育成の方針によって醸成さ 城下町一乗谷の芸能盛んな環境は、 初代朝倉孝景の家訓

- 四座の猿楽切々呼び下し、 その価をもって国の申楽の器用ならんを上洛させ 仕舞を習わせ候わば、後代まで然るべきか。 見物好まれまじく候、
- 僧俗共に一手に芸能あらんもの他国へ越されまじ

する場が催され芸能が興隆していったのである。 僧侶たちが一乗谷を多く訪れる中で、彼らをもてなし歓待 る越前猿楽が育ち、また、芸術や学問に見識の深い公家や れている。この方針の下、都で学び朝倉氏のもとで活躍す で才能ある人材の確保と育成が重要と考えていたことが表 世まで有益であるとしている。朝倉孝景が、国を治める上 のではなく、その費用を国内の芸能者育成にあてれば、後 条文では、 大和四座の芸能者を越前に呼び寄せて楽しむ

戦国時代に流行した尺八の一種「一節切」も出土しており、 している。また、朝倉一族の武将朝倉景鏡の館跡からは 「石橋」などの演目に用いられる能面 残りにくいにもかかわらず、武家屋敷跡の井戸内からは ることからうかがえるが、木製品は土中で腐食してしま ら茶の湯・立花・聞香に使う陶磁器の道具が豊富に出土す 当主の館跡だけでなく武家屋敷・寺院・町屋跡などか 乗谷において諸芸を嗜む文化的土壌が整っていたこと (獅子口) が一点出

求めるものも多くあったと思われ、そのニーズに答える面 福来石王兵衛正友について「越前国一乗住」と記されるよ 資料となっている。面打の系譜をまとめた『仮面譜』にも 谷での芸能興隆の様子を具体的に知ることのできる貴重な 文献・考古資料のどちらからも痕跡の見出しにくい、一乗 城下町で猿楽を嗜む者が多ければ能面や楽器などを

縁起「 (H) 倉氏が崇敬する寺社では法楽の祭礼芸能が行われていたも も文化行事の復興をとおして戦国大名としての権威を示す しかった曲水の宴や歌合・犬追物などを催したが、これに 芸能ではない武家で愛好される都の芸能を越前で普及させ で在地でも鑑賞できるようにするためのもので、 れていた大和四座の芸能を、 これも朝倉氏家臣たちの多くが芸能を習得していたことの 朝倉一族が奉納する神事能が春日神社で催されており、 神社を敬す、此時神事能あり、 (中略) 目的があった。 向のもと、五代朝倉義景は、戦国時代にはすでに絶えて久 るためのものであったと考えられる。このような文化的志 いるように室町幕府の御成儀式や武家の饗応において好ま 証といえるだろう。朝倉氏の芸能者育成は、条文に表れて 演目を披露しており(『朝倉義景亭御成記』・『朝倉始末記』)、 越前猿楽と朝倉氏家臣たち総勢三十余人の出演で十三番の と考えられる。 永禄十一年(一五六八)の足利義昭の朝倉館御成では、 三段崎弾正忠弼景いづれも子孫相続して世々春日の 「安波賀春日之縁起」にも「美作守氏景と改名す、 其弟安波賀但馬守茂景、 一乗谷阿波賀に鎮座する春日神社に伝わる 越前の芸能者が習得すること 表て六番也」とあるように 同若狭守重景、 向駿河守 田舎風の

ちも皆逃げ出したため、その遺風を伝えることは困難でく、その影響を受け、祭礼行事の主催者である住民たはないと思われる。しかし華やかな繁栄から滅亡という大はないと思われる。しかし華やかな繁栄から滅亡という大いでの影響を受けた祭礼や行事が残っていても不思議でいたのように、戦国時代の城下町一乗谷は芸能興隆著し以上のように、戦国時代の城下町一乗谷は芸能興隆著し

叩き大声を出して大地の霊気を呼び覚ますとされるオコナ で歌いながら搗いて」い 考えられ、 Bともに本来は春の到来を祝い五穀豊穣を祈願する行事と ることが主体となった行事が見られる。このことからA り女性だけに粥をふるまう行事など、共同で調理し共食す すめ [勝山市・二月二十日実施] のように、男性が粥をつく 会まで男性のみが参加して行うものや、 十七日講・二月十七日実施) [越前市] のように、 と考えられる。 所に多様な形で継承されている正月神事・オコナイの一 切り替える仕事初めの行事として行われているが、 小豆餅を食べて村落共同体の団結を確認し、冬から春へと 町で継承されているAいんのこと、Bおごけ祭りは、 今一度、一乗谷の祭礼・年中行事をみてみると、 かつては「 越前には、一章で挙げた⑪ごぼう講 小さい数本の杵をさして大声で大勢 たという様子からも、 ⑫観音さまの 調理から 地 面を棒で 浄 越前各 Œ 種 月

あったと考えられる。

城下町の都市的な環境に起因する年中行事ではなく、 た。それと同時に、 栄えていたと考えられ、山を越えて往来することが当たり 教寺町衆より夏菊を送りて所望」)、城下町の経済圏として と」の可能性も考えられ、このようなことが犬追物との関 などの年占神事が行われることも多いことから、 の説もあるが、正月行事では豊凶作を占う弓はじめや歩射 という行事名については「延年(えんねん)」がなまったと 行う行事が伝承されたのではないか。なお、「いんのこと」 な生活が維持されていたことで、男女それぞれに分かれて ながら、砥石や山林資源なども合わせることで比較的豊か 生活の中での行事と捉えられる。 の歴史を蓄積した土地であることを踏まえると、A・Bは 載る常慶寺砥石の産出など、城下町として栄える以前から 前国名勝志』)や、『和漢三才図会』にも越前名産品として 地だけでなく、泰澄が最初に開いたと伝える白山神社 兵衛の屋敷跡 (『越藩拾遺録 上』) など朝倉氏ゆかりの 前の時代には、城下町の玄関口のひとつとして機能してい たことからも(『宗養発句付句』永禄二年(一五五九)、「浄 うイメージを持つが、戦国時代には、浄教寺には町衆がい イの乱声のような雰囲気が伝わる。 浄教寺は谷奥の行き止まりに位置する不便な土地とい 浄教寺が朝倉一族の三段崎弾正 農地の少ない谷間の集落 車社会となった現代で 射のこ ( | 越 公伝承 同源

中行事と考えられ、 め、行事の目的のひとつであった野焼きの意味も失われた なった。この過程で住民は稲作をすることがなくなったた して保存されることとなり、農地のほとんどが公有地化 昭和四十年以降は、戦国城下町の遺構が良好に残る遺 間のうちに田畑へと変えられ農村として存続した。さらに 人・寺社すべてが引っ越していったことで、その跡が短期 全くない場所であったものが、城下町滅亡後、武士や町 並ぶ城下町の中枢ということで、 築かれ、重臣たちの屋敷や寺社・町屋などが密集して立ち きった内側部分がその範囲であり、中央には朝倉当主館 町は、一乗谷の谷幅が狭まっている部分を上・下城戸でし 村の構成員となっていく意味も付加されている。 合した内容となっていて、男子が参加することで一人前 的としていたことがうかがえる。 農耕期前に河原の枯草を燃して病害虫を駆除することを目 の内町で続けられてきた行事で、 係を伝える言い伝えへとつながったとも考えられ 次にCの火祭りであるが、城下町の中心部であった城 発掘調査を経て集落を取り込む形で大規模な史跡 現在伝承されている行事内容は、 その始まりも城下町滅亡以後に、 戦国時代には田畑などは 年籠りや左義長なども融 昭和四十年頃までは春 城戸の

内

の内に新しく農村集落ができて以降と考えられる。

- 五月五日に行われる。
- 山から取れる草木で飾り付けた作り物を作る。
- 集落内を子どもたちが練り歩く。
- 練行終了後、作り物を打ち壊す。

花で飾ったもの)が先導して柴神輿が渡御し、神社へ帰ると、 もの柴神輿と幼児の持つ等神輿(ブナの枝を箒のように束ね 代となる花束を据えて御神霊を迎えて社殿へ遷座するとい 民俗文化財)である。五月五日に行われる春祭りで、 りとして始まったとされ、祭礼の発祥も荘園が成立した平 範囲に含まれることから、 行事にみえる共通点が古い形で保たれていると考えられる 了となる。このような内容から、じじぐれ祭にはD 最後は若衆が柴神輿へ飛び乗り、依代の花を奪い合って終 形の祭りの形を残しているとされる。神輿渡御では、子ど うもので、春に山から神様を里宮へお迎えするという古い らブナやシデの若枝を集めてきて柴神輿を作り、そこに依 で行われている「じじぐれ祭」(昭和四十二年福井県指定無形 東に足羽川を遡り最上流部にある住吉神社(福井市河内町) このような特徴の祖型となるような祭礼が、一乗谷から じじぐれ祭が行われる河内町は、 荘園の五穀豊穣を祈願する春祭 藤原氏の荘園小山庄の ・ E の 山か

化をもたらした可能性がある。

国時代に城下町として繁栄したことが華やかな行事へと変 には、一乗谷の都市的な環境が影響したとも考えられ、 ませる風流へと変化させている。このような祭礼の風流 たり、猪に見立てた作り物とすることで、人々の目を楽し が宿る新緑の草木で作られる神聖な依代を、花で飾り立て ものであったと考える。その後、D·Eの行事は、神の力 じぐれ祭のように荘園の豊作祈願の春祭りとして行われた いた。以上のようなことから、D・Eもその始まりは、 以前から宇坂庄の鎮守社として阿波賀春日神社が鎮座して 藤原氏近衛家の荘園宇坂庄に含まれる土地で、城下町成立 安末期に求められる。一乗谷も朝倉氏が本拠とする以前

を退治すべし、 退治し難く、博士トして曰く、 如く、天翔け地に入り万民を悩ます。然るといえども人皆 異相の事出来す。白猪有り、長七尺余身縮じむれば小鼠 として朝倉高清が猪を退治した逸話が載る。 倉家伝記」(京都大学総合博物館蔵)には、朝倉先祖 すことができる。五代朝倉義景の当代中に作成された「朝 るが、これについては、朝倉氏の系譜にそのルーツを見出 の渡御が、農作物を荒らす猪を退治する意味に変化して 特に、Dのしたんじょうについては、神様を乗せた神輿 朝倉の高清是れ也。高清身長六尺余、 西国の武士異相の人有り之 「時に関東に の功績

事へと変化していったと推察する。 氏の城下町という歴史を経て風流化し、 とは考えにくいので、 に、新たにこのような逸話を行事の意味へと結びつけるこ になったという家紋の由来ともなっている。 ことで、それまで一ツ木瓜紋を用いていたのが三ツ盛木瓜 説として戦国時代からすでに語り継がれていたことがうか よって見いだされ、見事退治し源頼朝から二ツ木瓜紋を賜 眼し神殿より鏑矢一とて下され、 ぐべき由仰せ出だされ、 がえる。高清の猪退治は、 わったというもので、猪退治が朝倉氏の功績を象徴する伝 の人々を悩ませる白猪を退治するため朝倉高清が占い 面あり、 いて安々と白猪を平らぐ、高清この忠によって頼朝の御赦 五体毛深し、 関東より但州の養父大明神に猪退治の事祈り申す。 為末代の二ツ木瓜を賜う。」というように 熊毛をもって衣裳となす。 中世からあった荘園の春祭りが朝倉 高清御承申す。三七日 褒美として二ツ木瓜を賜わった 是を奇瑞として関東に赴 即ち召し出 したんじょうの行 朝倉氏滅亡後 この御 一暇を申 関東

一、瀧殿権現社 義景公口決勧請スに「わびまつり」として書かれる祭礼に関係がみられる。賀春日神社の由来や祭礼について記した『阿波賀由緒書』最後に、Fの戦国まつりであるが、これについては安波

元禄十年丑年本社同事建立、瀧殿三所権現卜云、

とも申す、神霊遺恨宥すため、ちくらおきどの毎年八月廿日祭礼、御供御膳三方、わびまつり

はらいをよみとなへ申由、

て、 要と瀧殿権現のわびまつりが受け継がれている。 その根底には義景の菩提を弔うため建立された松雲院の法 まつりは、 ためにわびまつりが行われるようになったのである。 権現社が建立され、怨みを残して死んだ義景の霊を鎮める とあるように、 ないが、春日神社では、 命日の八月二十日に行われていた。 現在では賑やかな観光イベントとなってい 朝倉義景の霊を祀っ 元禄十年の社殿再興の折り た瀧 現在は執行されて 殿権 現 の祭礼 るが

#### おわりに

視され、多くの祭礼芸能・行事が淘汰され廃絶していく中容に朝倉氏が醸成した文化的環境や芸能興隆の歴史、城下できた。まずは越前全体の祭礼・年中行事の特徴を捉え、てきた。まずは越前全体の祭礼・年中行事の特徴を捉え、てきた。まずは越前全体の祭礼・年中行事の特徴を捉え、てきた。まずは越前全体の祭礼・年中行事の特徴を捉え、のちこそ、新年を迎え春の訪れと豊作平穏を祈る行事が重いた。越前は雪深い風土であり春を待ちわびる思いが強いからこそ、新年を迎え春の訪れと豊作平穏を祈る行事が重いた。越前は雪深い風土であり春を待ちわびる思いが強いからこそ、新年を迎え春の訪れと豊作平穏を祈る行事が重いた。

変化しながらも続けられてきたと考えられる。で、行事存続の意味や内容を付加し、他の行事とも融合し

築し連綿と続けられている祭礼・行事が多くみられる。 地田の水海の田楽能舞のように、中世の祭礼芸能が受け 池田の水海の田楽能舞のように、中世の祭礼芸能が変から近世、そして現代へと支配者や社会・生活様式が変から近世、そして現代へと支配者や社会・生活様式が変から近世、そして現代へと支配者や社会・生活様式が変から近世、そして現代へと支配者や社会・生活様式が変から近世、そして現代へと支配者や社会・生活様式が変から近半の経済的基盤が保かれている祭礼・行事が多くみられる。

と変化してからは、 とがわかる。 化を受けた場所であり、その継承は極めて困難であっ の遺風さえも残り得なかった。一方で、近世以降、農村 にしていたであろう住民たちも逃散していった後では、そ や寺社が焼失し、 された文化行事や神事能などは、その会場となっていた館 ての格式や経済力を象徴するものであったため、盛大に催 から城下町の誕生、滅亡、そして谷間の農村へと劇的な変 た上で、一乗谷の事例を見てみると、この地は中世の荘園 このような越前の祭礼・年中行事の発祥と変遷を踏まえ いんのことのような年中行事が求められ、そこに朝倉 特に朝倉氏の愛好した芸能は、 芸能を習得した武士たちや見物を楽しみ 豊作を祈 願 共同体の団結を高めるた 戦国大名とし

> 祭礼・年中行事には、朝倉文化とこの土地が経験した変遷 に内安全や五穀豊穣を祈願する素朴で古風な祭礼であった と思われるものが、一万人以上が暮らす城下町となり、見 と思われるものが、一万人以上が暮らす城下町となり、見 と思われるものが、一万人以上が暮らす城下町となり、見 と思われるものが、一万人以上が暮らす城下町となり、見 と思われるものが、一万人以上が暮らす城下町となり、見 と思われる戦国まつりにも、朝倉義景の霊を鎮めるためという おれる戦国まつりにも、朝倉義景の霊を鎮めるためという おれる戦国まつりにも、朝倉義景の霊を鎮めるためという が下町滅亡の歴史が根底にあることがうかがえ、一乗谷の 大繁栄の記憶が付加され語り継がれることになったと考え に繋栄の記憶が付加され語り継がれることになったと考え

#### 註

の歴史が、多様な形で影響を与えているといえるだろう。

- (1) 朝倉氏の文化・芸能については、米原正義『戦国武士と 「戦国大名朝倉氏による芸能の保護と越前猿楽」『芸能史 「戦国大名朝倉氏による芸能の保護と越前猿楽」『芸能史 研究』一九七六年、拙稿「朝倉氏と芸能―幸若舞
- 福井県教育委員会 二〇〇三年。(2)『福井県の民俗芸能―福井県民俗芸能緊急調査報告書―』
- 『福井県史 資料編6』六六五頁

3

(5) 山路興造「中世山村における祭祀と芸能―天竜川沿いと能の伝承と断絶―」『祭礼と芸能の文化史』二〇〇三年。(4) 拙稿「越前志津原白山神社の祭礼芸能―能装束にみる芸

九八〇年。 越前の小祠 ・小堂を中心に―」『芸能史研究』 六八号 一

- 6  $\widehat{7}$ 『福井県史 『福井県史 資料編6』六二〇頁。 資料編6』六一九頁。
- 8 斯波政綿袖判安堵状とともに、同日付けで出された清覚 どが確認される。 色節(芸能者)へ支払う礼銭が四貫弐百文であることな なる牛玉田について本物返で買い戻す旨や、正月神事で 島孝治家文書)には、牛玉宝印を配布する費用のもとと 左衛門・同衛門二郎証状〔永正十八年(一五二一)〕(上

と而此らいしもとを本物返に五石弐斗五升之分地家 貫弐百文、已上此分をそたて候ハゝ、此田地私方へ 御礼銭色節ニ四貫弐百文入候、是を地家より御出候 公方様御不審候間、 へ出候者、 を五石弐斗五升米之代ニ永代地家へ参置候、但兄弟 候間迷惑仕候て、 永正二年十月八日之らいし本を闕侯て、地家へ中絶 則御一行を相副候て参候、米五石弐斗五升并四 仍為後日証文状如件、 田地を返可給候、 牛玉田を永正参年之歳より此下地 色々申分候て御一行を被下候、 殊二此就牛玉田候て従

清覚左衛門 (略押)

15

永正十八年。三月十三日 恒安村 同衛門 二郎

9 二月十三日に行われ、二月十五日に行われる田楽能舞と は別日に実施されているが、『鯖江藩寺社改帳』〔享保六 水海村のオコナイ行事の「水海のばいもしょ」は 月瀬薬師堂村人衆御中江まいる

> 年 (一七二一)〕には 右米三石弐斗之訳

五斗ハ正月十五日三番三役米

壱斗ハ同日なるわひ役米

とあり、ばいもしょのルーツと思われる「なるわひ」が 田楽能舞と同日に行われており、 福井県史 連の正月行事として行われていたことがうかがわれる。 壱斗ハ同日あまでんがく役米 資料編6』四一三頁。 月ヶ瀬薬師堂と同じく

- 福井県史 資料編5』二六頁。
- 福井県史 資料編5』二九頁。

12 11 10

の銘を刻む刀を制作した刀鍛冶のように、戦国時代には 確認できるが、美濃の関から移住し「越前国一乗住兼則 れる芸能者で、応永年間から越前で活動していたことが 『仮面譜』に載る福来は『時衆過去帳』にも法名が記さ

安波賀春日神社については、朝倉氏遺跡資料館企画 ○九年を参照。 の神道伝授と阿波賀春日社」『神社継承の制度史』二〇 録『一乗谷の宗教と信仰』一九九九年、拙稿「吉田兼右 乗谷を拠点としたことが推察される。

14

じじぐれ祭りについては、『福井県無形民俗文化財』一 九九七年を参照。

## 《福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館主任